

## 研究主題

### 語彙力を高めるための英語学習の研究 ～発信型コミュニケーション活動を通して～

**要約：**本研究は、高校における「実践的コミュニケーション能力」育成の視点から効果的な語彙指導を探り、授業実践の中で、その有効性を検証することを目的とした。そのためにまず、「語彙力」とはどのような力であるかについて明らかにした。次に、高校2年生における語彙力調査を実施し、語彙サイズが4技能に及ぼす影響や語彙習得方法について調査した。その結果、高校生は単語の派生形、関連語、語と語のつながり(コロケーション)に関する知識の必要性をあまり感じていないことが判明した。そこで、授業に語彙ネットワーク形成を目指した活動を取り入れ、習得した語彙を運用する場として、「発信型コミュニケーション活動」を設定した。その結果、生徒の英語学習に対する意欲が高まり、語彙力を高めることができた。

**キーワード：**実践的コミュニケーション能力、語彙ネットワーク、受容語彙、発表語彙

## I 研究の背景と目的

### (1) 高校における「実践的コミュニケーション能力」育成の問題点

大学入試センター試験では、リスニング問題が導入され、筆記試験においても「実践的コミュニケーション能力」を測ることを目的とした出題傾向となっているが、国公立大学二次試験問題や私立大学の入試問題の中には依然として「和文英訳」や「英文和訳」を中心とした出題傾向が見られる。そのために、高校現場では大学受験準備のための、いわゆる「受験英語」指導に偏重せざるをえない現実がある。

このような現状を改善するために、文部科学省は平成15年3月に『英語が使える日本人』の育成のための行動計画を打ち立てた。その一つに英語教育に関する先進校を地域に形成するために、高等学校に「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)」を導入し、実践的コミュニケーション能力の育成を一層重視し、英語教育の改善を図った。この結果、SELHi研究校においては、英作文やプレゼンテーション、ディベートといった「プロダクション活動」や「英語使用活動」にも重点を置いたバランスのよい授業展開になっており、生徒たちの「やればできる」という達成感を高めている。

しかし、一般校においては、受験のための英語指導と日常生活の身近な話題を使って「コミュニケーション活動」を行う「オーラル・コミュニケーションI」での授業とに大きなギャップがあるように思われる。現行学習指導要領では「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能を有機的に関連づけてコミュニケーション活動を行うことを求めているが、現在の高校現場では、なかなか実践が難しく、高校英語教育における課題となっている。

### (2) 主題・副題設定理由

高校英語では教科書で扱う題材が専門的になり、そのために抽象語が増え、習得すべき単語の数も急増する。そのため、生徒は毎日単語の意味調べにかなりの時間を費やす。さらに大学入試を

受験する生徒は、教科書で扱う単語だけでは不十分なために単語集を持ち、ひたすら単語の意味を覚える。このような単語の丸暗記が生徒の「英語による発信力」の弱さの原因になっているのではないかと考え、生徒に真の「語彙力」をつけさせるための効果的な指導方法を探り出したいと思い、本主題を設定した。

副題については、(1)で述べたように、高校英語の柱とも言える「英語I」や「英語II」においては、膨大な数の新出単語を含んだ英文を訳読する一方で、生徒からの「発信」がないまま、授業が行われている。この現状を踏まえ、「英語I」や「英語II」において「実践的コミュニケーション能力」育成の視点から、「発信型コミュニケーション活動」を積極的に取り入れることにより、出会った単語が、「意味がわかる」単語から「使える」単語へと発展し、「語彙力」が高まるのではないかと考え、副題を設定した。

### (3) 研究の目的

語彙習得に関して、さまざまな面から分析・考察するとともに、先行研究や文献等から効果的な語彙指導法を探り出し、授業実践を通してその有効性を検証する。

### (4) 研究の方法

1. 文献・調査等から「語彙力」とはどのような力であるかについて考える。
2. 語彙サイズと語彙習得のための学習方法について、学習者の実態を調査する。
3. 研修会や文献研究・調査等を通してねらいに迫る指導法を探る。
4. 実践授業を通して仮説を検証する。
5. 実践結果をもとに、研究の成果と課題をまとめる。

## II 語彙力とは

### (1) 語彙知識の「広さ」と「深さ」

語彙知識には「単語を何語知っているか」という語彙知識の「広さ」、つまり量的な側面と「1つの単語についてどのくらいよく知っているか」という「深さ」、つまり質的な側面がある。先行

研究から、英文読解においては約 5000 語を習得するまでは、読解力は語彙サイズの大きさに影響を受け、5000 語を超えるあたりから、語彙知識の「深さ」が読解力に影響を及ぼすことがわかった。語彙に関する知識とは、例えば、語形の変化や同意語・反意語、または他の語とどうつながるか、どう発音するかといった知識のことであり、語彙知識が深まることで、語彙ネットワークが構築され、単語が記憶されやすく、また利用されやすくなり、発表語彙としても活用しやすくなると思われる。

## (2) 受容語彙から発表語彙へ

一般に、「英語を聞いたり読んだりして、単語の形のインプットを受けたときに、その意味がわかる語彙」を「受容語彙」と言い、「伝えたい意味を適切な形にして、言ったり書いたりできる語彙」のことを「発表語彙」と言う。Melka は受容語彙か発表語彙かはそれぞれ独立して存在するものではなく、「親密度（よく見たり聞いたりすると感じる程度）」によって、徐々に受容語彙から発表語彙に発展的に変化するものと考え、それには次の 4 段階を経るとした【望月正道・相澤一美・投野由紀夫, 2003】。

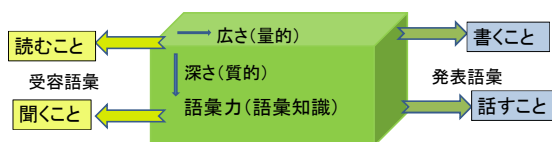
第 1 段階	模倣(imitation)と理解を伴わない再生 (reproduction without assimilation)
第 2 段階	理解(comprehension) リーディングやリスニングで受容語彙として使用できる状態
第 3 段階	理解を伴った再生 (reproduction with assimilation) ある程度のヒントがあれば単語が使える状態
第 4 段階	表出(production) ライティングやスピーキングで必要に応じて発表語彙として自由に使える状態

## (3) 語彙力の定義

以上の文献研究から、本研究では「語彙力を高める」ことを次のように定義した。

### 「語彙力を高める」とは？

語彙知識を質的、量的に拡大し、言語活動の場において、語彙を理解したり、適切に使用したりすることができる力を伸ばすこと



## Ⅲ 高校 2 年生における語彙力調査

### 1) 調査目的

- ① 高校 2 年生の平均的語彙サイズがどのくらいであるかを測定する。
- ② 語彙サイズが 4 技能にどのように影響しているかを調べる。

③ 語彙サイズによって語彙習得方法に違いがあるかどうかを調べる。

### (2) 調査対象

在籍校の 2 年次生と県内のある 2 校の高校からそれぞれ 2 年生 2 クラスの生徒に協力をお願いし、被験者として調査を行った。被験者の内訳は在籍校 64 名、A 校 74 名、B 校 71 名の計 209 名である。

### (3) 手順

語彙サイズの測定に関しては、受容語彙のサイズを測ることを目的とし、「望月テスト」を用い、1000 語から 4000 語レベルまでを測定した。その後、「英語の学習アンケート」に答えてもらった。

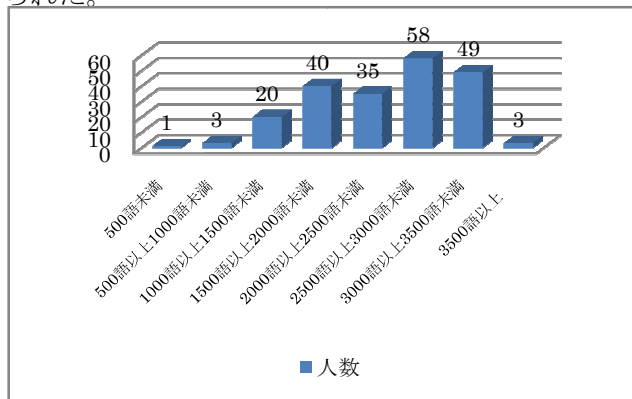
### (4) 分析方法

被験者 209 名のうち、語彙サイズが 3000 語を超える者（全体の約 25%）を上位群、語彙サイズが 2000 語以上 3000 語未満の者（約 44%）を中位群、2000 語未満の者（約 31%）を下位群と分け、それぞれの質問項目に対する答えの割合をグラフで示した。また、その割合に対して有意差があるかどうかに関して、語彙サイズを独立変数にとり、質問に対する回答を従属変数として、3 群間は、クリスカル・ウォーリス検定 (Kruskal-Wallis-H-test)、2 群間ではマン・ホイットニー検定 (Mann-Whitney-U-test) を用いて分散分析を行った。

### (5) 結果

#### 【語彙サイズに関して】

全体の推定平均語彙サイズは 2428 語で、最大値が 3733 語、最小値が 400 語で、下位群で標準偏差が高く、語彙サイズにかなりのばらつきが見られた。



語彙サイズ全体の分布図 (N=209)

### 【語彙サイズと 4 技能の関係】

- ① 語彙サイズが大きい生徒は「英語が好き」と思う傾向がある。(3 群間で有意差あり  $p=0.000$ )
- ② 語彙サイズが大きくなれば、英会話ができるようになりたいと思う傾向がある。(上位群と中位群で有意差あり  $p=0.016$ )
- ③ 英語を聞くときに困難を感じる要因に、上位群や中位群では相手の話し方が速すぎて聞き取れないことをあげる生徒の割合が高く、下位群では相手の話を聞いて、頭の中で整理ができないことを要因にあげる生徒の割合が高かった。
- ④ 英語を話すときに困難を感じるのは、相手の言うことが聞き取れないからと答える生徒の割

合が最も高く、どの群においても60%以上を占めていた。

- ⑤ 英文を読むときに困難を感じる要因は、上位群、中位群では単語・熟語の意味がわからないこと、下位群では文法・構造がわからないことをあげる生徒の割合が高かった。(3群間で有意差あり  $p=0.009$ )
- ⑥ 英文を書くときに困難を感じる要因は、3群とも文法がわからないことをあげる生徒の割合が最も高かった。
- ⑦ 音読練習については、3群とも授業時のみ行っていると答えた生徒が70%を占めた。

### 【語彙サイズと語彙習得の関係】

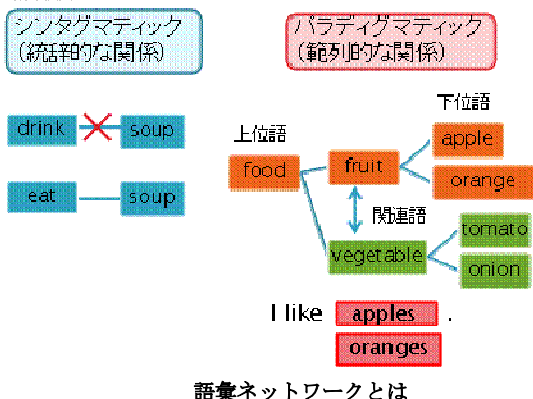
- ① 語彙サイズが大きくなれば、語彙習得を簡単だと思う傾向がある。(上位群と下位群で有意差あり  $p=0.016$ )
- ② 単語を覚えることが苦手な理由は何かという問いに対して、3群ともスペルが覚えられないからと答えた生徒の割合が最も高かった。群別では、上位群・中位群では1つの単語に意味が複数あるからと、意味的な点を理由にあげ、下位群では品詞によって形が変わるといった形態的な点をあげる生徒の割合が高かった。
- ③ 語彙サイズによっては、語彙の習得方法に大きな違いが見られず、どの群も、派生形、同義語、反対語、コロケーションといった、語彙知識の「深さ」にはあまり関心が払われていないことがわかった。

## IV 授業実践にあたって

### —「英語Ⅱ」における授業の工夫—

語彙力を高めるには、新しい単語を1つ1つ覚えるのではなく、出会った単語を既知の単語と結びつけ、ネットワークを形成し、活用することによって拡大していくことが重要であると考え、語連想の観点から2つのネットワークに着目した指導法を考えた。

### 語彙のネットワークとは？



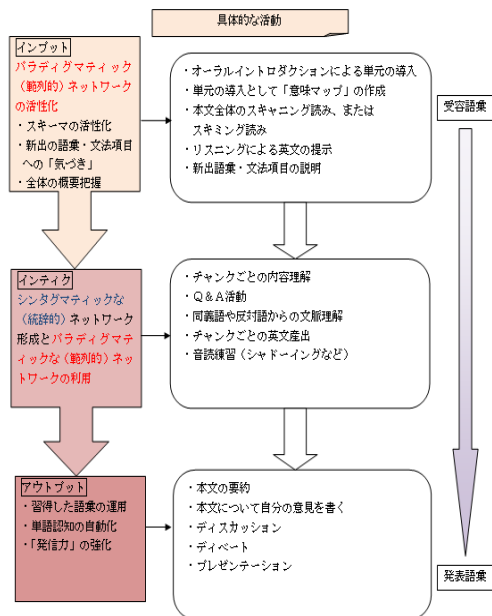
## V 授業実践

6月下旬から12月中旬まで、県内T高校2年生のあるクラス(40名在籍)で、「英語Ⅱ」において3回の授業実践を行った。語彙ネットワークを形成・活用しながら、出会った語彙が受容語彙から発表語彙に発展することをねらいとし、下図のようなインプット、インテイク、アウトプット

の3段階を設定し、各段階における活動内容を考えた。

使用教科書：NEW English PAL II (桐原書店)

指導単元：Lesson4 The Man Who Dreamed of Flying  
Lesson5 Space Junk  
Lesson6 The Rice Cooker Story



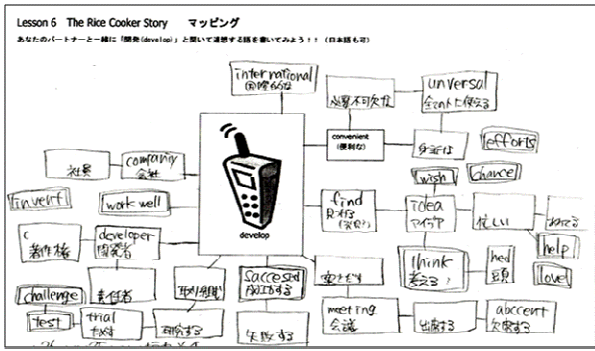
### 単元指導の流れ

(1) インプットとして「意味マップ」作成—パラダイグマティックなネットワークを活用して—単元の導入に「意味マップ」を作成させた。この活動は読み手の背景知識(schema)<sup>1</sup>を効果的に活性化することができ、これから読むテキストに興味を持たせ、読みやすくする効果がある。

### 【指導手順】

- ① develop という単語について、簡単に英語で説明をした後、生徒に develop という単語を聞いて連想する語をワークシートに書き出させる。
- ② 時間を与えた後、生徒から思いついた単語をあげさせ、板書する。
- ③ 次に、教科書を読ませ、develop という単語に関連する語を抜き出させた。生徒はここで検索読みをしながら、本文全体を1回読むことになる。
- ④ 生徒が教科書からどんな単語を抜き出したかを確認しながら、生徒が抜き出した単語を意味マップに書き加える。教科書から抜き出した語はこの題材のキーワードとなるので、ここでフラッシュカードを使って音韻、スペル、意味を確認しておく。

<sup>1</sup> 人の経験によってできたさまざまな物事に関するひとまとまりの知識



意味マップ

前のレッスンで習得した、technology (科学技術)、laboratory (実験室)、cooperation (協力)、essential (不可欠な) を連想する生徒もいた。この活動によって、既知の単語と新出単語を結びつけることができ、生徒の語彙ネットワーク形成には非常に有効であると実感できた。

(2) インテイクとしての活動内容

●シンタグマティックなネットワーク形成。

- ① 語彙チャンクに対する認識と理解
- ② コロケーションに対する認識
- ③ シャドーイングによる音読練習
- ④ 単語の接辞の理解
- ⑤ 単語カードによる学習

①と②については、レキシカルアプローチの提唱者である M. Lewis の著書“IMPLEMENTING THE LEXICAL APPROACH”で紹介された活動を取り入れた。

①について

生徒各自にコンピュータの教科書音声ファイルと本文のテキストファイルを開かせ、音声を聞きながら、英文をチャンクごとに改行させ、同時にまた、強く読まれる単語にはフォントの色を変えさせた。その際、「音の単位」とチャンクは一致すると教え、音の強弱や高低に注意を払わせ、チャンクを認識させた。

②について

本文中から「動詞+名詞」、「形容詞+名詞」の関係にあるコロケーションを抜き出させた。次にコロケーションを定着させるために、教師がコロケーションを形成している単語をアトランダムに読み上げ、生徒に読まれた単語を適切な空所に入れさせた。

●パラディグマティックなネットワーク活用

- ① 本文中の関連語から文脈を読み取る
- ② 未知語の推測
- ③ 英英辞典の定義による単語の言い換え

(3) アウトプット活動

－「発信型コミュニケーション活動」

① 本文の要約を書く

新出単語の説明として使用したフラッシュカードをキーワードとして、話の流れに沿って黒板に貼り、生徒に教科書を閉じて要約を書かせた。生徒からは、「難しかったが、要約を書くことで話の流れがわかりやすくなった」という意見が得

られ、「読むこと」と「書くこと」の活動を有機的に関連付けることにより、相乗的な効果が得られることがわかった。

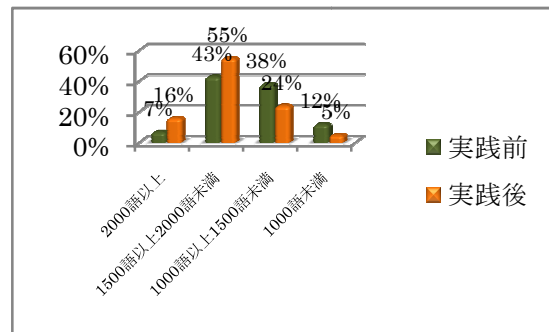
② 読んだ内容に対して自分の意見を書く

読んだ内容に対して生徒同士がお互いのメッセージを交換することで、「発信」したいという気持ちが育つと考え、必ず単元の終わりに自分の意見を書かせることにした。例えば、Lesson5は「宇宙ゴミ」に関する話であったので、「あなたなら、どんな宇宙ゴミの回収方法を考えるか」というテーマで5文程度の英文を書かせた。

(4) 授業実践の成果

●語彙サイズの伸び

12月中旬に第3回の授業実践を終えて、語彙サイズを「望月テスト」を用いて測定した。約6ヶ月間で、全体として106語の伸びが見られた。



語彙サイズの変化

●英語学習に対して

授業実践前のアンケート調査で「英語が好き」、または「まあまあ好き」と答えた生徒が23%だったのが、実践後には55%に伸びた。また、「単語を覚えることが得意か」という質問に対して、授業実践前は、「とても得意だ」、または「やや得意だ」と答えた生徒が20%だったのが、実践後には39%に伸びた。

VI. 研究のまとめ

(1) 結論

本研究を通して以下のことが明らかになった。

- 語彙習得には、音韻、形態、意味の3つを結びつけることが重要であり、フラッシュカードや単語カードが有効である。
- 語彙チャンクを意識させた活動は英文の構造理解には有効である。
- 語彙習得ストラテジーの獲得は英語学習に対する意欲を高める。
- 「発信型コミュニケーション活動」を通して、語彙知識を深めることができる。

(2) 今後の課題

本研究では授業実践において、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の活動を統合させて指導することができたが、時間的な制約から「話すこと」の活動にまで発展させることができなかった。限られた時間内で、4技能を統合して指導する方法を今後も考えていく必要がある。